

日蓮大聖人御書全集

なかおきのにゅうどうしょうそく

中興入道消息

新版
1766
ゝ
1771

なかおきのにゆうどうしようそく

中興入道消息

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

なかおきのにゆうどうふさい

弘安2年('79) 11月30日

58歳

中興入道夫妻

がもくいつかんもん

おく

た

そうら

お

みようほうれんげきよう

鵜目一貫文、送り給び候い了わんぬ。

妙法蓮華経の

ごほうぜん

もう

あ

そうら

お

御宝前に申し上げ候い了わんぬ。

にほんこく

もう

くに

しゅみせん

みなみ

いちえんぶだい

そもそも、日本国と申す国は、須弥山よりは南、一閻浮提

うちじゅうこうしちせんゆじゆん

うち

はちまんしせん

くに

の内縦広七千由旬なり、その内に八万四千の国あり。いわ

ごてんじく

じゅうろく

たいこく

ごひやく

ちゅうこく

じっせん

しょうこく

ゆる、五天竺、十六の大国、五百の中国、十千の小国、

むりよう

ぞくさんこく

みじん

しまじま

くにぐに

みな

たいかい

無量の粟散国、微塵の島々あり。これらの国々は皆、大海の

なか

いけ

木葉

散

中にあり。たとえば、池にこのはのちれるがごとし。

にほんこく　たいかい　なか　こじま　潮　満　み　干

この日本国は大海の中の小島なり。しおみては見えず、ひ

少　見　ほど　そうら　かみ　筑　い

ればすこしみゆるかの程にて候いしを、神のつき出ださせ

たま　のち　にんのう　初　じんむてんのう　もう　だいおう

給いて後、人王のはじめ、神武天皇と申せし大王おわしま

さんじゅうよだい　ほとけ　きよう　そう

しき。それよりこのかた三十余代は、仏と経と僧とはま

ひと　かみ　ぶつぼう

しまさず。ただ人と神とばかりなり。仏法おわしまさねば、

じごく　知　じようど　願　ふ　ぼ　きようだい　別

地獄もしらず、浄土もねがわず。父母・兄弟のわかれあり

つゆ　消　にちがつ

しかども、いかながるらん、ただ露のきゆるように、日月

隠　たも　打　思

のかくれさせ給うようにうちおもいてありけるか。

にんのうだいさんじゅうだいきんめいてんのう　もう　だいおう　ぎよう

しかるに、人王第三十代欽明天皇と申す大王の御宇に、

くに いぬい すみ あ ひやくさいこく もう くに か

この国より戌亥の角に当たつて百済国と申す国あり。彼の

くに 聖 名 おう もう おう こんどう しゃかぶつ ほとけ

国よりせいめい王と申せし王、金銅の釈迦仏と、この仏の

と たま いっさいきよう もう 書 読 そう 渡

説かせ給える一切経と申すふみと、これをよむ僧をわたし

ほとけ もう 生

てありしかば、仏と申すものもいきたるものにもあらず、

きよう もう げてん ふみ 似 そう もう もの 言

経と申すものも外典の文にもにず、僧と申すものも物はい

どうり 聞 かたち なんによ 似

えども道理もきこえず、形も男女にもにざりしかば、かた

怪 驚 そう だいじん だいおう おんまえ

がたあやしみおどろきて、左右の大臣、大王の御前にして

せんぎ たぶん 用

とこう僉議ありしかども、多分はもちうまじきにてありし

ほとけ 捨 そう 禁 そうら

かば、仏はすてられ、僧はいましめられて候いしほどに、

ようめいてんのう

みこ

しょうとくたいし

もう

ひと

敏

達

にねんにがつ

用明天皇の御子・聖徳太子と申せし人、びだつ二年二月

じゅうごにち

ひがし

む

なむしやかむにぶつ

とな

おんしやり

十五日、東に向かつて南無釈迦牟尼仏と唱えて、御舍利を

みて

い

たま

どうろくねん

ほけきよう

どくじゆ

たも

御手より出だし給いて、同六年に法華經を讀誦し給う。

しちひやくよねん

おう

ろくじゆうよだい

およ

それよりこのかた七百余年、王は六十余代に及ぶまで、

漸

ぶつぼう

広

そうら

にほん

ろくじゆうろつかこくふた

しま

ようやく仏法ひろまり候いて、日本、六十六箇国二つの島

至

くに

くにぐに

こおりごおり

ごうごう

さとさと

むらむら

にいたらぬ国もなし。国々・郡々・郷々・里々・村々に、

どうとう

もう

てらでら

もう

ぶつぼう

じゆうしよ

じゆうしちまん

堂塔と申し、寺々と申し、仏法の住所すでに十七万

いっせんさんじゆうしちしよ

にちがつ

明

ちしや

よよ

一千三十七所なり。日月のごとくあきらかなる智者、代々

ぶつぼう

広

しゆしよう

輝

賢

人

くにぐに

に仏法をひろめ、衆星のごとくかがやくけんじん、国々に

じゅうまん

充滿せり。

ひとびと

じぎよう

しんごん

ぎよう

かの人々は、自行には、あるいは真言を行じ、あるいは

はんにや

にんのう

あみだぶつ

みようごう

般若、あるいは仁王、あるいは阿弥陀仏の名号、あるいは

かんのん

じぞう

さんぜんぶつ

ほけきようどくじゆ

観音、あるいは地藏、あるいは三千仏、あるいは法華經読誦

もう

むち

どうぞく

勧

しおるとは申せども、無智の道俗をすすむるには、「ただ

なむあみだぶつ

もう

たと

によにん

おさなご

儲

南無阿弥陀仏と申すべし。譬えば、女人の幼子をもうけた

掘

川

独

るに、あるいはほり、あるいはかわ、あるいはひとりなる

はは

はは

もう

聞

付

必

たじ

には、『母よ、母よ』と申せば、ききつけぬればかならず他事

捨

助

なら

あみだぶつ

をすててたすくる習いなり。阿弥陀仏もまたかくのごとし。

われ おさなご

あみだぶつ はは

じごく

穴

がき

我らは幼子なり。阿弥陀仏は母なり。地獄のあな、餓鬼の

堀 落 い

なむあみだぶつ もう

おと

ほりなんどにおち入りぬれば、南無阿弥陀仏と申せば、音と

ひび かなら きた

救 たも

いっさい

響きとのごとく、必ず来つてすくい給うなり」と、一切の

ちじん おし たま

わ にほんこく

もう

習

智人ども教え給いしかば、我が日本国かく申しならわして、

とし 久

そうろう

年ひさしくなり候。

にちれん ちゅうごく みやこ もの

へんごく

しょうぐん

しかるに、日蓮は中国・都の者にもあらず、辺国の將軍

とう しそく

おんごく もの たみ こ

そうら

等の子息にもあらず、遠国の者、民が子にて候いしかば、

にほん こく しちひやくよねん いちにん

とな

そうら

日本国七百余年に一人もいまだ唱えまいらせ候わぬ

なんみょうほうれんげきよう とな

そうろう

みなひと

ふぼ

南無妙法蓮華経と唱え候のみならず、皆人の、父母のご

にちがつ

しゆくん

渡

ふね

とく、日月のごとく、主君のごとく、わたりに船のごとく、

かつ

みず

飢

はん

おも

そうろう なむ

渴して水のごとく、うえて飯のごとく思つて候南無

あみだぶつ

むけんじごく ごう

もう

そうろう

じき

阿弥陀仏を、「無間地獄の業なり」と申し候ゆえに、食に

いし 炊

岩 石

うま

跳

わた

石をたいたるように、がんせきに馬のはねたるように、渡り

おおかせ

ふ

きた

聚

落

たいか

付

に大風の吹き来るように、じゅらくに大火のつきたるよう

敵

寄

遊

女

后

に、にわかにかたきのよせたるように、とわりのきさきに

驚

嫉

妬

そうろう

い

なるように、おどろき、そねみ、ねたみ候ゆえに、去ぬ

けんちようごねん しがつ にじゅうはちにち

いまこうあん にねん じゅういちがつ

る建長五年四月二十八日より今弘安二年十一月まで

にじゅうしちねん

あいだ

たいてん

もう

強

そうろう

つき

満

二十七年が間、退転なく申しつより候こと、月のみつる

潮 差

にちれん

いちにんとな

がごとく、しおのさすがごとく、はじめは日蓮ただ一人唱え

そうら み ひと あ ひと き ひと みみ 塞 まなこ

候いしほどに、見る人、値う人、聞く人、耳をふさぎ、眼

怒 くち 顰 て 握 齒 嚙 ふぼ

をいからかし、口をひそめ、手をにぎり、はをかみ、父母・

きようだい ししよう 善 友 敵 のち ところ じとう りようけ

兄弟・師匠・ぜんうもかたきとなる。後には所の地頭・領家、

のち いっく 騒 のち ばんにん 驚

かたきとなる。後には一国さわぎ、後には万人おどろくほ

ひと くち 真 似 なんみようほうれんげきよう 唱

どに、あるいは人の口まねをして南無妙法蓮華経となえ、

あつく しん に とな

あるいは悪口のためになえ、あるいは信ずるに似て唱え、

謗 に とな にほん

あるいはそしるに似て唱えなんどするほどに、すでに日本

こくじゅうぶん いちぶん いっこうなんみようほうれんげきよう くぶん

国十分が一分は一向南無妙法蓮華経、のこりの九分は、あ

りようほう

疑

いつこうねんぶつしゃ

るいは両方、あるいはうたがい、あるいは一向念佛者なる

もの ふぼ 敵 しゅくん しゅくせ

者、父母のかたき、主君のかたき、宿世のかたきのように

旬 そんしゅ ごうしゅ ぐんしゅ こくしゅとう むほん もの

ののしる。村主・郷主・郡主・国主等は、謀叛の者のごと

怨

くあだまれたり。

もう

たいかい う ぎ かぜ したが

さだ

かくのごとく申すほどに、大海の浮き木の風に随つて定

きようもう

こくう

上

じようげ

めなきがごとく、軽毛の虚空にのぼりて上下するがごとく、

にほんこく

追

歩

とき

被

とき

打

とき

日本国をおわれあるくほどに、ある時はうたれ、ある時は

禁

とき

きず

被

とき

とき

おんる

いましめられ、ある時は疵をこうぶり、ある時は遠流、あ

とき

でし

殺

とき

打

追

る時は弟子をころされ、ある時はうちおわれなんどするほ

どに、去ぬる文永八年九月十二日には御かんきを被
い ぶんえいはちねんくがつじゅうににち ご 勘 被

北国佐渡の島にうつされて候いしなり。
ほつくくさ ど しま 移 そうら

世間には一分のとがもなかりし身なれども、故
せけん いちぶん 失 み こ

最明寺入道殿・極楽寺入道殿を地獄に堕ちたりと申す
さいみようじのにゆうどうどの ごくらくじのにゆうどうどの じごく お もう

法師なれば謀叛の者にもすぎたりとて、相州鎌倉竜の口と
ほっし むほん もの 過 そうしゅうかまくらたつ くち

申す処にて頸を切らんとし候いしが、科は大科なれども
もう ところ くび き そうら とが たいか

法華經の行者なれば左右なくうしないなばいかんがとや
ほけきよう ぎようじや そう 失

おもわれけん。また、遠国の島にすておきたるならばいか
思 おんごく しま 捨 置

にもなれかし、上ににくまれたる上、万民も父母のかたきの
かみ 憎 うえ ばんみん ふ ぼ 敵

思

どう

くに

殺

ようにおもいたれば、道にてもまた国にても、もしはころす

餓

死

充

か、もしはかつえしぬるかにならんずらんとあてがわれて

ほけきよう

じゅうらせつ

おん

恵

ありしに、法華経・十羅刹の御めぐみにやありけん、ある

てん 失

由

ご

覧

しま

いは天とがなきよしを御らんずるにやありけん、島にて

怨

もの

おお

なかおきのじろうにゆうどう

もう

ろうにん

あだむ者は多かりしかども、中興次郎入道と申せし老人

ありき。

か

ひと

とし 経

うえ

こころ

賢

み

楽

彼の人は、年ふりたる上、心かしく身もたのしくて、

くに

ひと

ひと

思

ひと

ごぼう

故

国の人にも人とおもわれたりし人の、「この御房は、ゆえあ

ひと

もう

しそくとう

厭

憎

る人にや」と申しけるかのゆえに、子息等もいとうもにくま

いげ もの 大 旨 かれ ひとびと げにん
ず、その已下の者ども、たいし彼らの人々の下人にてあり

ないない 過

しかば、内々あやまつこともなく、ただ上の御計らいのま

みず にご

澄 つき くも 隠

まにてありしほどに、水は濁れどもまたすみ、月は雲かくせ

晴 理

とが

顕

どもまたはるることわりなれば、科なきことすでにあらわ

言

虚

故

れて、いいしこともむなしからざりけるかのゆえに、

ごいちもん しよだいみよう

許

由 もう

御一門・諸大名はゆるすべからざるよし申されけれども、

さがみのかみどの おんはか

許 そうら

上

相模守殿の御計らいばかりにて、ついにゆり候いてのぼり

ぬ。

にちれん にほんこく

だいいち

ちゆう

もの

かた

並

ただし、日蓮は日本国には第一の忠の者なり。肩をなら

ひと せんだい

こうだい

おぼ

ぶる人は先代にもあるべからず、後代にもあるべしとも覚

ゆえ

い

しょうかねんちゅう

おおじしん

ぶんえいがんねん

えず。その故は、去ぬる正嘉年中の大地震、文永元年の

だいちようせい

とき

ないげ

ちじん

ゆえ

占

大長星の時、内外の智人、その故をうらないしかども、な

故

しゅつたい

もう

知

にのゆえ、いかなることの出来すべしと申すことをしらざ

にちれん

いっさいきようぞう

い

かんが

しんごん

りしに、日蓮、一切経蔵に入つて勘えたるに、真言・

ぜんしゅう

ねんぶつ

りつとう

ごんしょう

ひとびと

ほけきよう

軽

禅宗・念仏・律等の権小の人々をもつて法華経をかるし

ゆえ

ぼんてん

たいしゃく

おん

答

にし

くに

めたてまつる故に、梵天・帝釈の御とがめにて、西なる国

おお

つ

にほんこく

責

勘

こ

に仰せ付けて日本国をせむべしとかんがえて、故

さいみようじのにゆうどうどの

進

そうら

しよどう

もの

最明寺入道殿にまいらせ候いき。このことを諸道の者

痴 笑

くかねん 過

い ぶんえいごねん

おこづきわらいしほどに、九箇年すぎて、去ぬる文永五年に

だいもうここく

にほんこく

襲

由 ちようじよう

大蒙古国より日本国をおそうべきよし牒状わたりぬ。こ

合 ゆえ

ねんぶつしや

しんごんしとう

怨

うしな

のことのあう故に、念仏者・真言師等、あだみて失わんと

れい

かんど

げんそうこうてい

もう

みかど

おんきさき

せしなり。例せば、漢土に玄宗皇帝と申せし御門の御后に

じようようじん

もう

びじん

てんかだいいち

びじん

上陽人と申せし美人あり。天下第一の美人にてありしかば、

ようきひ

もう

后

ご 覧

ひと

おう

楊貴妃と申すきさきの御らんじて、この人、王へまいるな

わ

覚

劣

せんじ

もう

掠

らば、我がおぼえおとりなんとて、宣旨なりと申しかすめ

ふぼ

きようだい

流

ころ

て、父母・兄弟をば、あるいはながし、あるいは殺し、

じようようじん

牢

い

しじゆうねん

責

上陽人をばろうに入れて四十年までせめたりしなり。

これ似もそれそうろうににちれんて候。かんもん「日蓮顕が勘文あらわれて、

だいもうここく じようぶく にほんこく 勝 ほつし にほん

大蒙古国を調伏し、日本国かつならば、この法師は日本

だいいち そう われ いとく 衰 おも

第一の僧となりなん。我らが威徳おとろうべし」と思うか

ざんげん 知 かれ 言 葉

のゆえに讒言をなすをばしろしめさずして、彼らがことば

もち くに ほろ れい にせいおう

を用いて国を亡ぼさんとせらるるなり。例せば、二世王は

ちようこう ざんげん りし うしな ちようこう

趙高が讒言によりて李斯を失い、かえりて趙高がために

み 滅 えんぎ みかど 時 平 大 臣 ざんげん

身をほろぼされ、延喜の御門は、しへいのおとどの讒言に

かんしようじよう うしな じごく 墮 たま

よりて、菅丞相を失って地獄におち給いぬ。これもまた

ほけきよう 敵 しんごんし ぜんしゆう りっそう

かくのごとし。法華経のかたきたる真言師・禅宗・律僧・

じさい ねんぶつしゃとう もう おんもち にちれん 怨 たも
持齋・念仏者等が申すことを御用いありて、日蓮をあだみ給

故

にちれん

卑

たも

ほけきよう

うゆえに、日蓮はいやしけれども持つところの法華経を、

しやか

たほう

じつぽう

しよぶつ

ぼんてん

たいしやく

にちがつ

してん

りゆうじん

釈迦・多宝・十方の諸仏・梵天・帝釈・日月・四天・竜神・

てんしやうだいじん

はちまんだいぼさつ

ひと

まなこ

惜

しよてん

天照太神・八幡大菩薩、人の眼をおしむがごとく、諸天の

たいしやく

敬

はは

こ

あい

守

帝釈をうやまうがごとく、母の子を愛するがごとく、まぼ

重

たも

ほけきよう

ぎようじゃ

ひと

ばつ

たも

りおもんじ給うゆえに、法華経の行者をあだむ人を罰し給

ふぼ

敵

ちようてき

おも

たいか

おこな

うこと、父母のかたきよりも朝敵よりも重く大科に行い

たも

給うなり。

しかるに、貴辺は故次郎入道殿の御子にておわするなり。

きへん

こじろうにゆうどうどの

みこ

ごぜん

嫁

こころ

賢

ひと

こ

御前はまたよめなり。いみじく心かしこかりし人の子と

嫁

こにゆうどうどの

跡

継

こくしゅ

よめとにおわすればや、故入道殿のあとをつぎ、国主も

おんもち

ほけきよう

おんもち

ほけきよう

ぎようじゃ

御用いなき法華経を御用いあるのみならず、法華経の行者

養

たま

年

々

せんり

みち

送

迎

をやしなわせ給いて、としどしに千里の道をおくりむかえ、

い おさなご

娘

ごぜん

じゅうさんねん

じようろく

卒塔婆

立

去ぬる幼子のむすめ御前の十三年に丈六のそとばをたて

おもて

なんみようほうれんげきよう

しちじ

あらわ

て、その面に南無妙法蓮華経の七字を顕しておわしませ

ほくふうふ

なんかい

鱗

かぜ

当

たいかい

く

ば、北風吹けば南海のいろくずその風にあたりて大海の苦

離

とうふう

せいざん

ちようろく

かぜ

み

触

をはなれ、東風きたれば西山の鳥鹿その風を身にふれて

ちくしやうどう

免

とそつ

ないいん

う

畜生道をまぬかれて都率の内院に生まれん。いわんや、か

卒塔婆 ずいき

て

まなこ み

そうろうにんるい

のそとばに随喜をなし、手をふれ眼に見まいらせ候人類

かこ ふぼ か

くどく

てん にちがつ

をや。過去の父母も彼のそとばの功德によりて天の日月の

じょうど 照

こうよう ひと

さいし

げんぜ

ごとく浄土をてらし、孝養の人ならびに妻子は、現世には

いのち ひやくにじゅうねんたも

ごしよう

ふぼ

りようぜんじょうど

寿を百一十年持つて、後生には父母とともに霊山浄土に

詣 たま

みず 澄

つき 映

鼓

打

まいり給わんこと、水すめば月うつり、つづみをうてば

響

思

そうら

とううんぬん

ひびきのあるがごとしとおぼしめし候え等云々。これより

のちのち

ほけきよう

だいもく

あらわ

たま

後々の御そとばにも、法華経の題目を願し給え。

こうあんねんつちのとうじゅういちがつさんじゅうにち

みのぶさん

にちれん

かおう

弘安二年己卯十一月三十日

身延山

日蓮

花押

なかおきのにゆうどうどののにようぼう

中興入道殿女房